

大連湾に入り、柳樹屯に上陸するのは四月一五日である。

大國の山皆な低き霞かな

禿山の麓に青き柳かな

から山の風すきふなり故さとの隅田の桜今散らん

見わたせはもろこしかけて舟もなし霞につく春の海原

なき人のむくろを隠せ春の草

戦のあとにすくなき無かな

馬関までかへりて若葉めつらしや

須磨の灯か明石のともし時鳥

五月一七日、船上で吐血し、二三日に和田岬検疫所に着き、放免される。この間、講和条約調印の時期には「四月一七日 海城丸に在り事無し。一八日 講和成れりとの風説船中行はる」とか、従弟藤野古白の訃報には「春や昔古白といへる男あり」と詠み、条約批准の報には「五月十日 講和成り万事休す…」と記す。「陣中日記(四)」の末尾では「大砲の音も聞かず弾丸の雨にも逢はず腕に生疵一つの痛みなくおめくと帰るを命冥加と言は言へ故郷に還り着きて握りたる剣もまだ手より離さぬに暈の上に倒れて病魔と死生を争ふ誰一人其愚を笑はぬものやある」と悔しがる。

私がこの日記を「日本」紙上で読んだとき、なんと穏やかで、やさしげな従軍記かと思つたものである。子

規に先立つて従軍し、当時、読者の人気を博していたという「国民新聞」の徳富蘇峰の旅順占領記や国木田哲夫(独歩)の弟取二宛の形をとった「愛弟通信」の漢文調で、声高の愛國的な文章と比べると、一層その感を強くする。大陸の山河や小動物、村人の営み、日本兵や記者たちの日常生活に及ぶ筆致は、克明で、誠実さを

のぞかせていると言えよう。

ところが、翌一八九六年一月の「日本」とその付録週報に連載された「従軍紀事」では、終始、軍隊内における新聞記者の待遇について、激しい口調で告発し続けるのである。官尊民卑著しく、無位無冠の記者は一兵卒同様とする軍の上官たちと談判に及ぶ。が、開き直られ、職務上も、個人的な関心からもなるべく長く従軍しようと思つていたが、これを機に「帰国せんと決心せり」と心情を吐露する。内地で「陣中日記」の連載が始まったからであるう、憲兵屯所に呼ばれ、記事への詰問がなされている。具体的な内容には触れていないが、「叱られた」程度であつたらしい(五月一七日)。憲兵は、その後の記事への牽制のつもりであつたのだから。また、前述の小説「我が病」は、軍隊内での記者たちの待遇を批判的に描き、口語体の、会話も十分に取

り入れた、今でいうルポルタージュ風の物語が展開しそうなところで途切れている。

短い従軍体験にもかかわらず、その作品化に積極的であつたことがうかがわれる。これらの作品で、子規自身、触れることはないのだが、従軍前後には多くの人々の援助があつた。まず、「日本」への入社やその後の経済的支援には、主筆で社長の陸羯南、入社に一役かつた古島一雄がいる。近衛師団従軍には、松山の旧藩久松定讓がいて、子規を抜擢したともいう(小林高壽「正岡子規評伝」一九九四年、一九〇頁)。また、第二軍兵站軍医部長の森岡外を従軍先に訪ね、俳句談義に興じているが、そんな記述もこれらの作品には見当たらない。これらの善意を超えたところに、子規の鋭い批判精神が培われていたのだから。

〔運河〕一九九七年二月

* 作品の表記は『子規全集』講談社、一九七五年)に拠る。